

お寺の社会性

— 生奥坊主のつぎやき —

巻拾

竹中尚文

1. 日本でイスラム教

神戸の北野界隈を歩いていると、神戸ムスリムモスクがある。ドーム建築で四隅にミナレットという塔がある。海外で見るような壮大なモスクではないが、立派なモスクとしての建物である。お祈りの時間が来るとアザーンが聞こえる。私は、かつて乾燥地帯の街で夕方の時間に町中に響くアザーンを聞いていた。どこか哀愁を帯びたような声調で、とてもいいものだった。

旅行記などで、アザーンを「コーランが聞こえる」と誤解している人もあるが、コーラン（クルアーン）ではない。アザーンとはイスラム教

の定めるお祈りの時間になると、それを知らせるために独特の声調で神を讃える詩を朗誦するものである。

神戸モスクに話を戻そう。ここからは、パキスタン出身の新井アハサン氏に伺った話を掲載したい。

竹中(以下T)：まず、門柱に「神戸ムスリムモスク」と書いてありますが、ムスリムとは何ですか？

新井アハサン(以下A)：ムスリムとはイスラム教を信じている人、即ちイスラム教徒と言う意味です。

T：この神戸モスク以外に日本にはどのようなモスクがどのくらいあ

るのですか？

A : 今、日本には 100 近いモスクがあります。このようなドームやミナレットがあるモスクは神戸と東京だけですが、最近ビルの中を改装したり、一般の家を買ったり借りたりして改装しています。また、この神戸モスクが日本では最も古く昭和 10 年(1935)からあります。

T : 日本にあるモスクは全部同じ派なのですか？

A : イスラム教に於いて派はそんなに大きな問題ではないのです。聖典(クルアーン)は一つしかないのですから。確かにスンニ派とシーア派がありますし、また国や地域によってイスラム学者の解釈の違いで全く同じとは言えないけれど、大きな違いはありません。日本でどのモスクも特定の派はなく、みんなの一つのイスラム教としてお祈りをしています。

T : イスラム教に教団の代表者はいるのですか？

A : キリスト教のローマ法王のような人はいません。イスラム教では、私はこの法学者の解釈が好きだと

かということはありませんが、それぞれで教団を作るようなことはありません。だから、イスラム教には教団という概念そのものはありません。

T : イスラム教にプロの宗教家と言うか、他に仕事を持たない宗教家はいますか？

A : はい、います。その人はイマームといいます。しかし、キリスト教の牧師や仏教の僧侶のように特別の資格が必要なわけではありません。誰でもイマームになれる。しかし、イマームは説教をしなければならないので、実際に勉強をしている人でないとダメです。

T : ムスリムにはハジと称される人がいますが、その人達は一般の人から尊敬されるのですか？

A : ハジはメッカに行った人のことです。メッカに行くのはムスリムの義務です。経済力がある人はメッカにお参りをするのは当然です。だから当然の義務を果たしただけだから、そのことで特に偉くなったわけではありません。

T : 神戸モスクに於いてのアハサン

氏の地位と言うのか役割は？

A：私は日本の法律に定める「宗教法人神戸モスク」の理事の一人です。ここは私のような何人かの理事で運営しています。そして時には、イマームの役割をすることもあります。

T：話しは変わりますが、イスラム教に生死観と言うのはどのようなものでしょうか？

A：生まれることは肉体に魂が入ることなのです。そして、死ぬことは肉体から魂が離れることなのです。そして、その魂と言うのは神の命令なのです。「魂」と「神の命令」とイコールなのです。

T：ムスリムがよく口にする「インシャアッラー」と言うのは、そういう意味で「神の思し召すまま」ということなのです。

A：そう、そういう意味では私たちの人生は神の命令によるものなのです。そして、死ぬと魂は天国に行くのです。もちろん天国に行くにはそれにふさわしい人生を送らなければなりません。魂の無い人生を送ったならば、天国以外の所に行く

のです。

T：魂の出た後の身体はどうなるのですか？

A：死んだ後の身体は、魂がそこにあったものであるのだから、それなりの敬意を払わねばなりません。だからムスリムにとってお墓はその人の人生への敬意を表すものです。尊い人生を送った人ならばそれにふさわしい死体があるはず。だから、お墓を大切なのです。

T：ムスリムは火葬にしませんよね？

A：絶対にしませんし、してはならないことなのです。火葬にするとその人の人生の意味が無くなってしまいます。

今、私たちは墓地が足りなくて困っています。私たちは埋葬をしますが、日本のほとんどの所では火葬のみです。法律では埋葬を禁じていないのですが、ほとんどの所が条例で埋葬を禁じています。だから、私たちは本当に困っています。

T：そうですね、日本は仏教文化を背景とする社会ですから、火葬で問題ないのです。しかし、ムスリムは

そうはいかないのですね。

T : 今日はどうもありがとうございました。

A : こちらこそ。

イスラム教の国を訪れた方はご存じだろうが、カレンダーが私たちとは異なる。イスラム教の国では金曜日が端にあって、赤い文字である。仕事は金曜日が休みであって、この日にモスクに行って礼拝をする。

このことは日本で仕事をして生活をするムスリムには不自由だろうと思うが、それは問題ではないという。困っているのは、埋葬ができないことだと言う。火葬というのは彼らが宗教的に受け入れることができない。同時にこの埋葬のことは我々の思いもしなかったところであった。

この問題は、日本の社会がホストソサエティーとしての準備が出来ていないうちに、日本でその生涯を終えようとしているムスリムが多くなっているのである。

2. 日系米人

2001年の「9.11同時多発テロ」の後、ムスリムへの嫌がらせや中傷がかなりあった。いわゆる「ヘイトクライム」である。あのテロ事件の後、アメリカではムスリムだけに対してはいつでも身元照会ができるようにしておくべきだとか、彼らの預金口座を凍結すべきだという声も上がった。

このような公的な次元でのムスリムへの締め付けは実行されなかったが、街角での罵声やネット上の中傷やムスリム経営の商店への不買やムスリムが理由の突然解雇などはあったようだ。

テロの犠牲者やその遺族の悲しみや痛みに対する共感をもっともなことである。しかし、その共感とムスリムへの敵対心と同一線上に置くのは、全く正当性がない。

このようなアメリカ社会の行為に、多くの日系米人は第二次世界大戦の時代とアメリカは変わっていないと言って、抗議の声を上げた。かつて自分たちが受けた扱いと、今ムスリムの人々が受けている扱い

は重なるものがあるからだ。

真珠湾攻撃を受けたアメリカは日本人及び日系人を捕らえて、キャンプと称する収容所に送った。収容所に送られる前から、アメリカ政府は日系人に対してのみ、正当な手続きを踏まずに逮捕することを許した。日本文化を広めようとする者はFBIに逮捕されていった。

当時の様子をかかなり正確に描いた映画『愛と哀しみの旅路』（監督：アラン・パーカー、主演：デニス・クエイド、タムリン・トミタ）の中で、映画館を営んでいた父親が逮捕されるシーンがあった。容疑は、日系人に日本映画を見せて日本的価値観を広めたというのであった。笑い話ではなく、当時の状況を描く現実味のある話しである。

日本の宗教を広めたと言うことで、全米のすべての寺院がFBIによって家宅捜索をされた。仏教僧侶は全員が逮捕された。当時の仏教開教使の多くは、日本から渡った人たちである。私なら、開戦の前に帰国したろうにと思った。

当時のアメリカ合衆国には、約

11万人の日本人及び日系米人が住んでいた。ちなみに、日本人が最も多く移民をした国はアメリカ合衆国である。その11万人は、一世と二世である。一世というのは明治後半期及び大正初期に渡米した人たちで、アメリカでの帰化も土地所有権も認められず、市民としての権利を持てなかった人たちである。そして、二世と呼ばれる人たちはアメリカで生まれたのだから、アメリカ国籍の人たちのことである。

この日本人及び日系米人の内、半数が仏教徒であったと言われる。残りの半数はキリスト教徒であった。これは、アメリカに向けて移民するときに、日本政府からキリスト教に改宗するように勧められたと言われている。それを記録した文書はなく、伝聞である。このような指導があったか無かったかは別にして、「郷に入っては郷に従え」という考え方が働いたことは想像に難くない。そこであえて、5万人余りの人が仏教を選んだのである。

5万人余りの人たちが仏教徒であることを選択したことに、僧侶達

は自分だけ日本に帰れなかったような気がする。しかし、実際にはアメリカで逮捕されていた僧侶達は大変であった。

彼らは一般の人たちと同じ所には送られなかった。ほとんどの日本人及び日系人が送られたのは転住センターと称する収容所であった。いわゆるキャンプである。これとは全く別に、ニューメキシコとテキサスとノースダコタの3カ所に軍と司法省が管轄する捕虜収容所があった。僧侶達が送られたのはそこである。

現在も昔もアメリカは移民の国である。移民というマイノリティーに対して、それを受け入れる社会、ホストソサエティーがある。ホストソサエティーには寛容の力というようなものが必要である。その意味では、アメリカ社会は第二次世界大戦の時に日系人キャンプを作るような失敗もした。そして、「同時多発テロ」の後、非寛容的姿勢を示した。その間、アメリカ社会は全く変わらなかったかという、そうではない。その間、アメリカの社会はホ

ストソサエティーとしての自覚をもって社会形成を計ってきた。それは恒常的な進捗ではなく、進んだり戻ったりの社会形成である。

3. 日本の仏教の姿勢

日本では、いつの間にかずいぶんと外国の人が増えた。それは、一時的滞在かと思っていたら、この国で生涯を終えようとしている人たちも増えていた。

日本社会は、その覚悟もないままホストソサエティーになっている。ホストソサエティーの側に回った仏教は果たして寛容性を示せるであろうか。

多くの日本人は「イスラム教徒」に対して攻撃的である印象を持つようだ。テレビで報道される「イスラム教徒」はそのようなイメージが作られているのではないか。私の知るムスリムは穏やかな人たちだ。

かつて私は、パキスタンのスワート渓谷に一ヶ月程滞在した。そこで穏やかに暮らす人たちに出会った。昨年、そのスワート渓谷でタリバー

ンが少女の頭を撃ったことが報道された。あの平和な所にまでタリバーンが入り込んだことが残念であった。報道というものはそこにある平和な日常を伝えるのではなく、そこで起きた異常な出来事を伝えるのである。

だから、テレビ報道からだけでムスリムが攻撃的であるなどと決めつけないで欲しい。確かにタリバーンのような人たちもいる。アメリカの牧師で「コーランを燃やす運動」を呼びかけた人もいる。彼の存在でキリスト教の性格を語ることはできない。日本のテレビで特定の仏教宗派がわかるように放映されると、“中立であるべきテレビ”が特定の宗派に肩入れをしたと抗議の声を上げる仏教徒もいる。彼らの偏狭性

をもって、仏教の性格を語るべきではない。

仏教は宗教戦争もしたことがなく、仏教は平和主義であると多くの日本人は思っている。仏教の特性として平和主義だといえるだろう。しかし、江戸時代の島原の乱とその一連の出来事に対して、仏教は少数派のキリスト教徒を見殺しにしたことを忘れてはならない。私たちは決して平和主義であると大きな顔をしていられない。

これからの私たち仏教徒が示す寛容性によって、平和主義であるといえるのではなかろうか。